

# 2014.5.11 奈良県連主宰ハイカーのための事故対応講習会

5月11日9:00~16:30

- 09:00 事故への対応と状況の判断（資料より）
- 10:00 危険箇所からの退避
- 12:00 休憩
- 13:00 一時的な搬送
- 15:30 ビバーク（来期への課題）
- 16:30 終了

## 遭難事故者への対応

街の中で急病負傷者の救助では、救急車の到着まで平均時間は6分と言われています。私たちは救急隊員や医療従事者へ引き渡す時間までの対応をすればよいのに比べ、山岳地域での病气事故の対応は医療機関やその従事者へ引き渡す時間が多く必要となります。時には数日かかる場合もあり、天候や地形などの自然環境に大きく左右されます。そのため傷病者は痛さや寒さなどの苦痛と同時に大きな不安にさらされます。これは緊急事態において致命的な結果をまねく可能性をはらんでいるため、有事に遭遇した登山者はこうしたアクシデントに対して適切な対応が求められます。

## 冷静な現状認識

- 1、救助可能な場所、負傷者への接近が可能か
- 2、医療機関までの所要時間の推測
- 3、天候の予測
- 4、自らに救助できる力があるか
- 5、安全な救助が展開できるか
- 6、救助に時間を要する場合の傷病者へのケアができるか

## 救助活動に入る前に

- 1、パーティーの中に冷静さを欠くものがないか
- 2、パーティーを危険な地域から非難させる
- 3、リーダーを決める（一般的には山行リーダー、及びサブリーダー）
- 4、記録を決める（本人情報、傷病状態観察、各時刻）

## 遭難事故者への近づきかた

- 1、危険な場所かを判断し、二重遭難の恐れの有無を判断して近づく（火山性ガス）
- 2、転落や雪崩など、落石や雪崩の二波などを起こしやすい位置に入る場合は特に細心の注意を払い負傷者に近づく（見張りにメンバーを割く）
- 3、傷病者へ近づく前に呼びかけをしない（高エネルギーの事故では頸椎損傷を疑い、傷病者の不用意な動きを作らない。自由に近づける位置ならば足元から）

## 傷病者の観察 意識の確認

- 1、緊急を要するかの判断（呼吸停止、心停止、意識障害、大出血）
- 2、医療機関、警察、防災（消防）への通報、救助依頼

## 応急手当の開始

（短時間に観察する。脈が弱い場合は確認が困難なため必要以上に時間を費やすため、現在の市民レベルでのCPRは「確認できない場合は停止として判断」行動する。意識がある場合は名前などを聞き、その場合は傷病者に威圧感を与えない。まずは自己紹介から）

「私は勤労者山岳連盟の〇〇と申します。救急法のインストラクターです（救急法を学んでいます）どうしましたか。大丈夫ですか。これから簡単な質問をしますのでお願いします・・・・」など救助活動の同意を得る。

“インフォームドコンセント”

## 傷病者へのストレスを避ける

- ・威圧感を与えない
- ・大声を上げない。穏やかに視線をはずさずに話しかける。大声をあげる場合は意識の低下等
- ・不用意に何度も同じことを聞かない
- ・傷病者の話しかけには耳を傾ける
- ・まわりの不用意な発言を控えさせる

## 応急手当て、CPR（心肺蘇生法）

- 1、胸部圧迫（心臓マッサージ）を最優先とします。  
気道確保、人工呼吸ができなかった場合は胸骨圧迫、  
人工呼吸は2秒／1回から1秒／1回へ
- 2、胸骨圧迫は強く、深く15回から30回へ
- 3、呼吸の確認（死戦期呼吸[しゃくり]

## 止血

直接圧迫止血が基本

（出血が起ると脳や心臓など重要な場所に血液が集中しやすくなるよう皮膚、筋肉などの動脈や静脈が収縮します。顔面の皮膚が蒼白になり、冷たく感じるのは血流が落ちるためです。また破れた血管も収縮して血液をでにくくします。外出血にはそれぞれ動脈、静脈、毛細血管からの出血があり、特に拍動に合わせて吹き出るような出血には注意し、直ちにゴム手袋をはめ、滅菌ガーゼ、または清潔なハンカチなどを傷面にあてて直接圧迫をくわえる。ガーゼに血液が染みても取り替えずに、その上にもう一枚重ねて圧迫を続けます。また、止血には感染を防止するために手袋（ビニール製）や袋などを使い、直接血液に触れないようにする）

血液の量は体重1kgに対して80cc（全体重の1/12～1/13）

総血液量の30%以上で重篤なショック症状、50%で死亡の危険に陥る

## 搬出

応急手当てと並行して搬出能力があるか判断する  
（無理をせずに救助要請をすすめる）

## 判断基準

- 1、メンバーの力量、疲労度、健康状態
- 2、環境の判断（日没までの時間、天候の判断、地理/地形の判断）
- 3、協力者の有無

## 安全地帯への一時的な搬送（危険地帯からの避難）

- 1、ドラッグ法
- 2、キャリー法
- 3、ヒューマンチェーン法

## 登山口、山小屋、へり救助地点までの搬送

- 1、ザック利用（背負い搬送、担架搬送）
- 2、ツェルト（梱包搬送）

## 緊急避難／緊急ビバーク

体調が悪い、コースを外れるなど、思わぬ環境で本来の予定が取れない場合、緊急に避難する事になります。日常的にツェルトやシュラフカバーなどを所持していない場合は岩陰や大木の周辺で、少しでも風雨、風雪を避ける事になります。着の身着のままでの一夜は非常に辛いものです。極力保温に努めます。

- 1、明るいうちに判断し、適地を探す。暗くなってから探す事は不可能。
- 2、可能ならシェルターを作成する
- 3、雨が避けられるなら眠る前に濡れた服は着替える
- 4、地面との断熱を図る（マット、ザック等）
- 5、非常食を食べておく
- 6、焚き火をする